

多様化する数学メディア

谷村省吾

今年の4月号から本誌の名称が『現代数学』に変わった。1968年に『現代数学』の名で創刊され、1978年に『Basic数学』、1998年に『理系への数学』へと改名し、2013年に『現代数学』に戻って来たことになる。このような幅広い読者向けの数学誌が45年の長きにわたって継続してきたことは日本の高い文化力の証しでもあり、祝福すべきことだと思う。

日本のような狭い国で、専門家向けではなく「数学ファン」向けの雑誌が毎月複数種発行される国は世界的に見ても珍しい。教養を愛する心は日本人の徳質の一つである。人々の知的好奇心を満たすような数学誌が今後も存続し発展していくことを私も心から願っている。

『現代数学』の創刊以来45年の間に世の中もずいぶん変わった。大学では「理学部数学科」という組織が「多元数理科学」や「国際総合科学部」のように「数学」を表に出さない名称に変わっていく現象があちこちで見られた。大学の教養部の解体が進み、教養部専属の先生がいなくなった。高校までの教育課程から数学がなくなることはなかったが、数学に限らず、あらゆる科目で学修内容が減らされ、それに合わせて大学入試問題も易しくなり、大学の授業内容もレベルダウンは免れないのが実情である。

一方で、コンピュータや通信技術の発達とともに情報理論・計算量理論・暗号理論などの新しい数学分野が生まれ、数学的思考に長けた人材に対するニーズが拡大した。また、インターネットの普及により、専門誌に載せなくても個人が数学や物理の論文を全世界に向けて発表できるようになった。数学に関する質問に答えるウェブサイトも多数立ち上げられているし、学生や引退教員が趣味で書いた数学の記事もネットに出回り重宝がられている。大学などの機関に属さず、独立した数学者として立身する若者まで現れている。

つまり、数学の学習・研究は、どの世代でも、どの職種でもやれるようになってきている。いまでも大

学は「数学研究のメッカ」ではあるが、既得権益を守る側になっている。このような時代に数学ファン誌の使命と生き残り戦略はいかなるものか？

おそらく、人類が生存している限り、数学そのものが廃れることはないであろう。数学は文明の基盤であり、人類は数学なしにはやっていけない。しかし人間は生まれながらに数学を知っているわけではなく、言語や他の学問と同様に一人一人が数学を学習して身に付けるより他ない。そうすると、いろいろなレベルの学習者が常時存在するので、学習者のレベルに応じた教材を提供することが望まれる。コンピュータを使えばインタラクティブな学習支援システムが作れるが、幼児から大学院生までの教育コースが電子メディアで構築されるには相当の時間がかかるであろう。本・雑誌などの紙メディアは、長い歴史があるがゆえに、コンテンツとノウハウの蓄積があり、「紙の本を手にとって読む」感覚は人と相性がよいので、紙メディアと電子メディアは今後も共存するであろう。むしろ電子メディアの方が流行の入れ替わりが激し過ぎて、コンテンツの歴史性を活かしてきていないのが現状である。この点を克服したとき、電子メディアが本格的に紙メディアを席卷するであろう。

『現代数学』の使命は、どんな読者でも楽しめる・得るところがあるような数学の記事を提供することであろう。本当に「誰が読んでも楽しめるところのある数学誌」を作ろうとすれば、非常に分厚い冊子か、あらゆる話題にちよつとずつ触れる冊子になってしまうので、この要望を文字通りに実現することは難しいだろうが、心がけとしてはそうあってほしいと思う。そして、数学は大切に、面白く、真剣に学び研究する価値のあるものだということを伝え続けるのが数学者の使命だろう。

【参考】ネット検索キーワード:mathoverflow, 数学問題集, 数学物理通信, 大人のための数学教室, NOTH.JP, 森田真生

(たにむら しょうご/名古屋大学)

